

## シモフリシオマネキの奄美大島における初記録

鈴木廣志<sup>1</sup>・勝 廣光<sup>2</sup>・常田 守<sup>3</sup><sup>1</sup> 〒 690-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学部<sup>2</sup> 〒 894-0506 鹿児島県奄美市笠利町手花部 311<sup>3</sup> 〒 894-0036 鹿児島県奄美市名瀬長浜町 29-3

## ■ はじめに

奄美大島は、南西諸島中央部の中琉球を構成する島嶼の一つで、総面積 709 km<sup>2</sup> と、沖縄島に次いで大きな島である。沖縄島に比べ山が広く深いいため陸域や陸水域の生物多様性に富んでおり、「東洋のガラパゴス」とも呼ばれ、固有種も多い島である（鮫島, 1995）。

十脚甲殻類に関する研究は、1963 年の上田による淡水産エビ類に関する研究に始まり、その後汽水—陸水域の甲殻類相（諸喜田, 1975, 1979, 1989；武田, 1989a；Shokita & Nishijima, 1976）や大島海峡の海産異尾類相ならびに短尾類相（Baba, 1989; Takeda, 1989b）が明らかにされた。さらに、近年になるとマングロープの潮間帯や飛沫転石帯において小型種や希少種の生息も報告されるにいたった（岸野ほか, 2001a, 2001b；野元ほか, 2002；鈴木ほか, 2008）。

このような中、勝と常田は、2005 年頃から本島北部に位置する手花部の細流にあるマングロープ林において、シモフリシオマネキ *Uca triangularis* (A. Milne-Edwards, 1873) のいることを知り、このたびその個体群の生息を確認したので、ここに報告する次第である。

## ■ 結果

**シモフリシオマネキの形態** 今回生息が確認されたシモフリシオマネキは、その学名の由来になっている通り、甲は強い逆三角形で、その後ろ半分が黒色で前半分が灰白色の地に小黑点が散在している（図 1）。雄の大きなハサミにも同様の小黑点が散在する。また、歩脚には灰色と黒色の縞模様や斑模様がみられる。小型個体ではこれらの模様がみられず、全体に白色を呈するものもあった（図 2）。甲幅 16 mm 程度に達する小型種である。

**生息域** シモフリシオマネキが生息していたのは、手花部の国道 58 号線の内側に位置する細流のメヒルギのマングロープがある潮間帯上部で、図 3 中手前のマングロープの根元あたりから上流に向かって 200 m 位までのマングロープ林の水路側の軟泥底質の地域であった（図 3）。このマングロープは主に右岸側に多くあった。この地域における底質の状態及び微地形のみが本種の生息環境として適していたためなのか、見た目が似



図 1. シモフリシオマネキのオス。

Suzuki, H., H. Katsu and M. Tsuneda. 2015. On the new records of *Uca triangularis* in Amami-Oshima Island, Kagoshima Prefecture. *Nature of Kagoshima* 41: 187-189.

✉ HS: Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima 890-0056, Japan (e-mail: suzuki@fish.kagoshima-u.ac.jp).



図2. シモフリシオマネキの小型個体。



図3. シモフリシオマネキの生息地の全景。細流の国道側から上流を望む。

ていた国道より外海側の潮間帯軟泥底質の部分では本種の生息は確認できなかった。

生息個体のサイズをみると、新規加入個体と思われる小型個体から成熟個体と思われる大型個体まで見られ、本地域における個体群は十分維持されていると思われた。本地域には、本種のほかに、ベニシオマネキ *Uca crassipes* (White, 1847) やオキナワハクセンシオマネキ *Uca perplexa* (H. Milne Edwards, 1852) なども生息していた。

生息状況 詳細な本種の生息状況は不明であるが、手花部の細流の潮間帯上部のマングローブ林（林内というよりも水路側の地域）には、概ね  $1\text{ m}^2$  に 10 個体程度が生息していた。この地域は約  $400\text{ m}^2$  に及ぶので、単純に見積ると総生息数は 4,000 個体と推定される。しかしながら、この地域にはベニシオマネキやオキナワハクセンシオマネキなどシオマネキ類だけでも 5 種、その他チゴガニやコメツキガニなども生息しているので、おそらく本種の生息数は 4,000 個体よりもはるかに少ないと考えられる。今後正確な生息数の調査が必要であろう。奄美大島には、手花部以外にも住用湾のマングローブ林など軟泥底質の潮間帯はまだ多数存在する。本種がこれら軟泥底質の潮間帯地域に生息する可能性は十分考えられるが、奄美大島全域における生息状況は、残念ながら、現時点では十分把握されていない。

本種は今まで、沖縄島、久米島、石垣島、西表島及び沖縄諸島以南の西部太平洋地域に分布す

ると報告されていた。従って、今回の奄美大島での生息確認はその北限域を大きく更新することとなった。岸野ほか (2001b) は今回本種の生息が確認された地域と全く同じ地域を調査しているが、ベニシオマネキとオキナワハクセンシオマネキの記録はしているが、本種の生息に関しては全く記録していない。従って、本種の生息は 2001 年以来起こったと考えられる。1995 年以来、本細流は、河川改修、護岸工事等とともに随時メヒルギの植栽なども進められ、細流の環境が本種の生息にとって改善されたことによるのかもしれない。この点は推測の域を出ないが、ただ言えるのは今後もこの細流の環境を保全することが、本種ならびに共存するシオマネキ類の保護に確実につながるということである。今後も細流環境の保全に心がけることを期待する。

## 引用文献

- Baba, K., 1989. Anomuran Crustaceans Obtained by Dredging from Oshima Strait, Amami-Oshima of the Ryukyu Islands, *Memoirs of the National Science Museum*, 22: 127-134.
- 上田常一, 1963. 奄美大島・屋久島・種子島の淡水エビ類. 島根大学論集 (自然科学), 13: 1-28.
- 岸野 底・米沢俊彦・野元彰人・木邑聡美・和田恵次, 2001a. 奄美大島から記録された汽水産希少カニ類 12 種. *南紀生物*, 43(1): 15-22.
- 岸野 底・野元彰人・木邑聡美・米沢俊彦・和田恵次, 2001b. 奄美大島の汽水産カニ類. *南紀生物*, 43(2): 125-131.

- 野元彰人・岸野 底・鈴木廣志, 2002. トリウミアカインモドキ (イワガニ科) の日本における南限記録. 南紀生物, 44(1): 56-58.
- 鮫島正道, 1995. 東洋のガラパゴス — 奄美の自然と生き物たち —. 南日本新聞社, 177 pp.
- 諸喜田茂充, 1975. 琉球列島の陸水エビ類の分布と種分化について — I. 琉球大学理工学部紀要, 18: 115-136.
- 諸喜田茂充, 1979. 琉球列島の陸水エビ類の分布と種分化について — II. 琉球大学理工学部紀要, 28: 193-278.
- 諸喜田茂充, 1989. 奄美大島産の陸水産エビ類相と分布, 環境庁自然保護局編, 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究. 昭和 63 年度奄美大島調査報告書: 267-275.
- Shokita, S. and S. Nishijima, 1976. Faunal list of inland-water malacostraca of Amami group, the Ryukyu Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Island, 2: 31-38.
- 鈴木廣志・藤田喜久・組坂遵治・永江万作・松岡卓司, 2008. 希少カニ類 3 種の奄美大島における初記録. Cancer, 17: 5-7.
- 武田正倫, 1989a. 奄美大島産の陸水性カニ類. 環境庁自然保護局編, 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究. 昭和 63 年度奄美大島調査報告書: 277-285.
- Takeda, M., 1989b. Shallow-water Crabs from the Oshima Passage between Amami-Oshima and Kakeroma-jima Islands, the Northern Ryukyu Islands, Memoirs of the National Science Museum, 22: 135-184 with Plate 4.